

三 次の文章を読んで、あとの(一)から(六)までの問いに答えなさい。

① 「環境」という言葉を耳にするとき、読者は何を連想するだろうか。緑豊かな森林の情景、最近では気候変動に伴う異常気象や災害をあげる人がいるかもしれない。では、「環境を守る」といった場合はどうだろう。開発によって失われる熱帯雨林、絶滅が危惧される野生動物、あるいは企業が宣伝する環境に優しい日用品、エコな自動車、そうしたものがあげられるだろう。

② しかし、ここで想定されている環境とは、そもそも何なのだろうか。ひとつの思考実験をしてみよう。仮にいま、この地球上で、人間を含む現生生物にとつてきわめて有害な物質Xが、人間活動によって、とてつもない規模で環境中に放出され、その結果、現在の生命の大半が絶滅したとする。そして大量の物質Xによって汚染された地球には、千年たつて、物質Xに適応した新たな生命が誕生し、新しい生態系のもとで人類のような知的生命体が誕生したとしよう。このとき確かに、現生生物にとっては、物質Xの大量拡散は途方もない環境破壊だったはずである。しかしその未来の生命体にとってはどうだろう。もし未来の生命体にとって、物質Xが生命維持に不可欠なものとなっていた場合、彼らは「古代の生物」である人類の環境破壊を、はたして非難するのだろうか。ここから導かれる結論は、一見奇妙に思えるかもしれない。しかし実際これとわめて似たことがかつての地球上では起こっているのだから。それは、私たちの生存に不可欠なオゾン層や、酸素を用いた呼吸のメカニズムが、実際には過去の生命活動である有害物質(「酸素」の大量)という環境破壊の結果もたらされたものだったことを指している。それが思考実験が教えてくれるのは、私たちが環境を語るとき、それが

著作権への配慮

にとつての環境」なのかをしばしば曖昧にすること、そしてそのことがいかに多くの混乱をもたらすのかということである。したがって考えてみたいのは、私たちが問題としている環境とは、そもそも何かということについてである。とりわけ「人間にとつての環境」とは何かについてここでは考えてみたい。(中略)

③ 動物学者の小原秀雄によると、生物には、その生物種が想定している固有の環境、広義の暮らしの場所(ハビタット)というものが存在する。そして生物の本来の存在様式とは、生物体とそうしたハビタットが一体になったときに、初めて成立するというのである。例えばムササビという生物は、飛鼠と呼ばれるひだを使って高所から滑空することができ、こうした特徴が、森林というハビタットと深く結びつく形で発達したことは明らかであろう。しかし生まれたばかりのムササビを、滑空できるような高所が一切存在しない、平たんな箱に閉じ込めて成育したとしよう。するとムササビは滑空するという本性を発現させることができなくなる。このときその個体は、確かに生物体としては野生のものと同じである。しかしその個体が、ここでムササビという存在を完全に確立している、はたして言えるのだろうか。小原の指摘は、生物にとつての環境が、単に生物種に固有のものであるだけでなく、その存在のあり方を規定するうえできわめて重要であるということを示唆しているのである。

④ では、私たち人間の場合はどうなのだろう。注目したいのは、人間にとつての環境の場合、生物体と深く結びつくハビタットが、単なる自然環境には収まらないという点である。人間という生物は、他の生物とは異なり、自然環境の上層に社会環境というものを自ら作り上げ、その二重の環境をハビタットとするからである。自然環境と社会環境が区別されることは、一見あたり前のようで、実際は人間にとつての環境の特徴

をよくあらわしている。人間の世界においては、この二重の環境が極めて普遍的な構造となるためである。例えば伝統的な山間部の集落においては、河川や奥山といった自然環境が土台となり、人間の関与によって、田畑や里山といった人工生態系が形作られている。他方でビル立する大都会に自然環境はないのかというと、アスファルトの下に多くの微生物を含んだ土壌が存在するように、やはりここにも二重環境があることに気づかされよう。このとき社会環境は、人間が人間のために、きわめて重要な役割をになっている。例えば私たちが移動的に、地域や文化の違いなど、社会環境のあり方によって、人間の姿が驚くほど変わってくることを知っていよう。

⑤ ここで注目してほしいのは、人間が作り出す社会環境というものには、目に見える「物質的な部分」と同時に、目には見えない「非物質的な部分」が存在するということである。物質的な部分には、例えば道具や構造物といったものがある。古代の石器や毛皮にはじまり、田畑や家屋、現代の高層ビルまで、これらはいずれも人間が、自然生態系に存在する物質の一部を人工的に組み替えたものである。それに対して非物質的な部分には、例えば言語や文化、より正確には、人々を秩序立てる社会制度や、私たちが物事を思考する前提となる概念や世界観といったものが含まれる。つまりヒトが人間になるにあたっては、こうした社会環境の物質的な部分と非物質的な部分が、ともに重要な意味を持つのである。

⑥ このように人間にとつての環境の特徴を理解することは、今日私たちが環境問題、あるいは「持続可能性」と呼ぶものについて、大事な示唆を与えてくれる。なぜなら人間にとつて、この二重の環境は普遍的な構造でありながらも、社会環境の規模や形態そのものは、この二十万年の間、驚くほど変化を遂げてきたためである。例えば農耕の成立以前と

以後とでは、社会環境が自然環境や人間に対してもたらす影響はまったく異なっている。これは農耕の成立によって初めて、人間が生存の基盤となる食料生産のシステムを自ら大規模に組織化できるようになり、耕地や都市、階級や宗教といった形で社会環境が膨張・複雑化していったためである。そしてもうひとつのターニングポイントは、産業革命以降に化石燃料を基盤とした社会環境が出現したことと深く関わっている。石炭や石油といった化石燃料は、太古の生物に由来する有機物が変化したものであり、それをエネルギー源とすることによって、社会環境はそれまで歯止めをかけたにしていた自然環境から、半ば独立して膨張できるようなったのである。

⑦ 読者に考えてほしいのは、環境を守るといっても、それが何者にとつての環境を指すものなのかを忘れてはならないということである。実のところ、すべての生物にとつて良いといえる環境など存在しない。そして私たちが人間である以上、純粋に人間のためではないと言い切れる環境保護も存在しないのである。環境を考えるうえで重要なことは、まずもって人間にとつての環境の特性について理解すること、そして自然環境、社会環境、人間という三つの要素の関係性と、その歴史的な変遷過程を視野に、私たちが環境危機と呼んでいる事態の本質がどこにあるのかを見極めていくことである。そして歯止めを失い膨張し続ける社会環境の「持続可能性」に対して、私たちがどのように向き合っていくのか、そのことが問われている。

(上)植田典幸「環境を守る」とはどういうことか―環境思想入門―による

(注) ①②は敬称略である。

○ターニングポイント＝転機、分岐点。